

國學院大學学術情報リポジトリ

企業の参加と都市祭りに関する一考察：
東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋野, 淳一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001045

企業の参加と都市祭りに関する一考察

——東京の神田祭・山王祭・渋谷の祭礼を中心に——

秋野 淳 一

はじめに

近年、大都市の都市祭りが大きなにぎわいを見せている。例えば、平成二九（二〇一七）年の神田祭の神輿宮入や平成三〇年の山王祭の下町連合渡御を現地へ赴いて見ていると、多数の参加者と観客を動員して盛んに行なわれていることがわかる。そして、にぎわいを形成する一つの要因として「企業の参加」が確認できるのである。

筆者は、拙著『神田祭の都市祝祭論——戦後地域社会の変容と都市祭り——』において、戦後地域社会の変容と神田祭の分析から、商人・職人の町が中高層のビル街に変わり、神田祭を運営している町会の人たちが少なくなったにもかかわらず、現代の神田祭が盛んに行なわれ都市祝祭の場を形成する要因として、五つの特徴（要素）を指摘した。

すなわち、①「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」、②「結集のための核の存在」、③「個人の活躍（人的要因）」、④「企業の参加」、⑤「非日常化するイベント」である。この五つの特徴をもとに、神田祭の動態を図1の「神田祭モデル」

(正式名「神田祭にみる都市祝祭モデル」)としてまとめ、他の都市祭りとの比較研究の起点とした。⁽¹⁾

この「神田祭モデル」をもとに、山王祭との比較を予備的に試みた結果、神田祭と同様な五つの特徴が見られ、企業の参加も大きな特徴の一つとして確認できた。⁽²⁾

そこで、本稿では、企業の参加に着目する。先行研究の指摘、神田祭や山王祭の実態、渋谷の宮益御嶽神社祭礼の実態(研究開発推進センター渋谷学研究会の研究成果の一部)などを整理した上で、企業の参加と都市祭りの特徴を浮き彫りにして、両者の関係を予備的に考察し、今後の研究課題を明らかにしておきたい。

なお、「企業」とは、一般に「利潤獲得を目的とする生産単位として、生産、販売などの経済活動を継続して行なう協働システムのない組織体。またはその活動」を意味し、出資形態により、私企業、公企業、公私合同企業に分けられる。⁽³⁾

一、先行研究に見る企業の参加と都市祭り

都市祭りを対象とした主な先行研究において、企業の参加はどのように捉えられてきたのであろうか。まずは整理

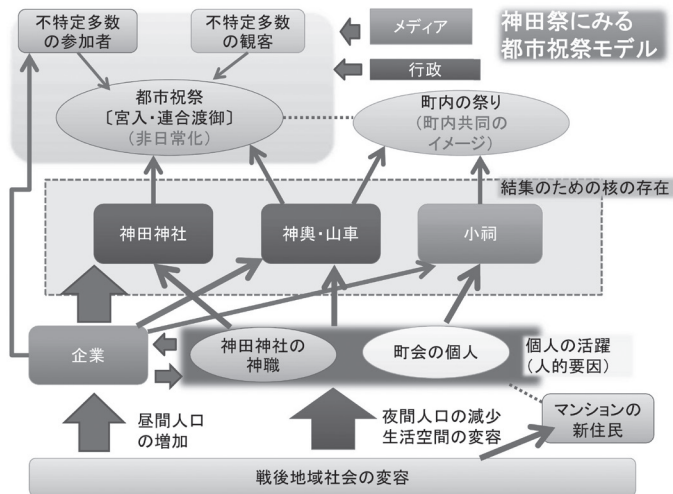


図1 神田祭モデル (拙著『神田祭の都市祝祭論』より、筆者作成)

をしておきたい。ここで対象となる都市祭りは大阪の天神祭、高円寺阿波おどり、小倉祇園太鼓、青森ねぶた祭り、阿波踊りである。

(二) 大阪の天神祭

文化人類学の米山俊直は、天神祭の担い手を神社側、氏子組織、講社（多くは同業者によって作られた講、これを米山は「社縁」と呼んでいる）の三つに大別している。この講社には、昭和五二（一九七七）年の時点では「講社並協力団体一覧表」には三五の団体が挙げられているが、米山はこのうち天神祭に不参加や渡御には関わらない団体などを除き、二三の団体について調査を行なっている。その結果、「この地縁（氏子組織）と社縁（同業者）は微妙にからみあっている。いま同業者の組織である講社も、もとをたどれば、その発生が氏子地域から出たものがすくなくない」（二三五頁）と指摘する。また、二三の団体について「孤軍奮闘型」、「有志型」（同業者有志型、新地縁有志型、信仰芸能有志型）、「組織型」（地縁組織型、市場組織型、企業組織型）の三つに分類している。組織型のなかに「企業組織型」があり、北信用友（北信用組合）、北浜^(株)団（大阪証券取引所株仲間）、実信（実業信用組合）の三つの講社を挙げている。「企業組織型」の三つの講社はいずれも金融関係であることがわかる。

米山は、この講社組織の存在を祇園祭との違いとして捉えている。すなわち、祇園祭は基盤に地縁的な町組を持つているのに対して、天神祭は地縁的な町組も一部にかかえながら、全体としては講社組織（＝社縁）を基盤にしている点⁽⁴⁾がもつとも大きな違いであると位置付けている。

(二) 高円寺阿波おどり

社会学の松平誠は、『都市祝祭の社会学』のなかで、八月最終土日に実施される高円寺阿波おどりの分析を行ない、金融機関の連と私企業連の参加について明らかにしている。

松平によると、金融機関の連は、昭和六〇（一九八五）年度は八つの金融機関（都市銀行や信用金庫など）の連が参加し、いずれも支店ぐるみの参加であるとしている。具体的には、八千代信用金庫五〇人（中心は高円寺支店在籍者。前年度は創立六〇周年のため一〇〇人参加）、太陽神戸銀行、他一行が参加していて、この三行は高円寺南氷川町会の一員であり、氷川神社の氏子として神輿を担ぐのに従業員数人を派遣していることを明らかにしている。

また、私企業連については、電電公社（現NTT）のでんわ連、英会話学校FIAの連、東日印刷（港区芝）の従業員で組織する東日連を挙げ、企業ぐるみの連もあれば、職場の自由な同好会（職場仲間がその家族や友人を引き入れ企業の枠をはみ出したもの）もあること、東日連は社内運動会を契機に結成し、高円寺の阿波おどりへ出演するようになったことなどを明らかにしている。

松平は、これらのうち、金融機関の連（サービスの連）は、団体の意思によって動き、「参加の目的は、地元へのサービスであり、それとおしての企業PRであり、参加そのものに意義があることで共通している」（二九四頁）として、「参加する連にとっては、阿波おどりに参加し、賑わいに一役買うことによって、地元へのサービスを実現する」とともに、何よりもまず、自分たちの企業の存在を観衆に知ってもらうことが第一義である」（二九四頁）と指摘している。

(三) 小倉祇園太鼓

文化人類学の中野紀和は、『小倉祇園太鼓の都市人類学』の「第四章 象徴としての地域伝統―神社と企業の連携―」

において、七月第三週末の三日間（金・土・日曜日）に実施される小倉祇園太鼓（八坂神社の祭礼）における神社と企業の関係に着目し、企業は参加に際して神社と町内の関係を模倣することで、町内との関係を重視していること、神社は精神的中核ではなく空間的通過点になっていることを考察している。そして、現在、神社の祭事を人的な側面から支えているのが、企業を中心とする新たな参加者たちであると指摘する。

小倉祇園太鼓は、祭りが実施される三日間のうち、一日目に安全祈願祭と御神幸、二日目に競演大会と山車の町内廻り、三日目に競演大会で構成される。

一日目に実施される御神幸に最も多く参加するのが企業からの派遣であり、町内からの応援がほとんど見られないとする。企業の御神幸への参加は、一九八〇年代半ばの「まわり舞台」の再現を契機として進み、平成五（一九九三年）には、JR西日本、JR九州、NTT、ダンタニ（梱包材料の会社）が参加したという。

平成一五年には、神社神輿の前に、女性中心の据え太鼓チーム「女無法松の会」が参加し、御神幸の最後尾を井筒屋（地元デパート）が務めた。中野はこの平成一五年の変化に注目し、「女性で、しかも町内ではなく新しい据え太鼓チームが先頭を歩くなど、神事としての祇園太鼓の位置づけが大きく変化したことを決定づける場面であった」（二二二頁）と位置付けている。また、神社神輿に後続する山車についても、八百屋西魚町の一番山車を除いて、大半が企業の山車であることも指摘し、平成六年の後続の山車は、西日本銀行、JR九州、JR西日本、井筒屋の四社であったという。

二日目・三日目に実施される競演大会の企業の参加にも注目し、「新入社員研修、新旧社員混合で業務の一環として、あるいはクラブ活動や一般公募等」（一二四頁）によってなされていることを指摘している。そして、百貨店の玉屋と井筒屋、小倉東映会館、国立小倉病院の参加の詳細について明らかにしている。

玉屋は、開店四五周年を控えた昭和五八（一九八三）年に祇園太鼓へ初参加し、「地域に溶け込めること、女性社

員が多いので女性にもできることという条件のもとで祇園太鼓への参加が検討」され、「小倉玉屋女子太鼓チーム」が編成された。従来、祇園太鼓は男性が打つものであったが、「彼女たちの参加は好意的に受け取られ、これ以降、女性の太鼓打ちが増加することになる」と指摘する。チームのメンバーは新人社員と希望者によって構成され、練習は就業時間終了後に時間外手当が支給される業務の一環として自社倉庫で行なっているという。

井筒屋は、昭和六〇年に祇園太鼓へ初参加し、競演大会には創業五〇周年にあたる昭和六二年から記念行事として参加した。昭和六三年に、社員の親睦団体「井和会」のなかに任意加入できる部の一つとして太鼓部を設置した。太鼓部ができるまでは会社から指名された者（「学生時代にスポーツをしていたもの」で、男性一二二人・女性五人）が参加していたが、太鼓部の誕生後、メンバーは入れ替わり、平成七年には二八人（男性八人・女性二〇人）の部員が所属した。太鼓部以外に山車の曳き手として約四〇人が集められるという。

小倉東映会館は、創業三〇周年の平成三年に「TOEI太鼓チーム」が結成され、記念行事として初参加した。メンバーは東映会館の従業員、一般公募の大学生や高校生、OLの混成であるという。

国立小倉病院は、平成元年に特別参加で初参加し、平成二年に正式な競演大会への参加を行なった。メンバーは、同病院に併設される看護学校の学生であるという。

注目すべきは、この四つの企業うち、国立小倉病院を除く三つの企業が開店や創業の記念行事として、参加やチームの編成などを行なっていることである。

こうした企業の参加の実態を踏まえ、企業と神社のつながりについて考察を行なっている。中野は、「小倉全体における神社への信仰心は希薄であることは否めないが、神社を完全に切り離すこともできない」（二二八頁）としつつ、町内の山車の多くは、お祓いを受け、神社での奉納打ちを行なっていて、若者たちの有志チームにも欠かせないので

あることを明らかにしている。しかし、それは「信仰心からとは考えにくい」と位置付け、神社での奉納打ちはパフォーマンスの一種として捉えている。そうした位置付けから、「神社が祇園太鼓の中核というよりも通過点になっているようだ。精神的な中核から空間的な通過点へと意味を変えているといえる」（二二九頁）と指摘している。その上で、「企業と神社とのかかわりは、地元町内と神社の間にあったつながりを模倣することで、新参者への風当たりを少しでも回避しようとする動きだといえる」と位置付け、「企業にとって気になるのは、神社との関係性が希薄になっても、神社を支え、祭礼を支えてきた町内の反応なのである。企業と顧客の関係を意識する企業側の論理がここにも表れている」（二三〇頁）と分析している。

さらに、女性チームの参加から、企業は古くからの「しきたり」を破る突破口としての役目を果たすことも指摘している。デパートという職種の女性の多さという社員構成が祭りの参加にもそのまま反映されていることを挙げ、男女の相違よりも企業の事情が優先され、女性の参加が問題にされることはなく、むしろ他との違いをアピールする絶好の機会にしているとみる。そして、こうした企業の論理を持ち込むことは、「日常のケの論理をハレの場に持ち込むこと」であり、企業は「神社の祭り＝ハレの場」としての意味を大きく変化させる牽引役となったと分析している。そして、中野は、議論を深めるべく、祭りイベントの関係に注目し、「祭礼と新規につくり出されるイベント」との大きな相違は、「行事がおこなわれる一連の空間に付与された意味」にあるとする。そして、イベント空間が意味のある場所へ変化する可能性を持つ一方で、場所が抽象的な空間へ変化する可能性も否定できず、お旅所の度重なる移動は、お旅所が宗教性を失い、イベント会場になるという脱宗教化が生じていると指摘している。

以上のように、中野は、祭りとイベントの関係は動態的なものと捉えつつ、「イベントの祭り化」の方向も視野に入れながらも、企業の参加については「祭りのイベント化」として捉えていることが窺える。これは、言葉を変えれば、

「祭りの世俗化」や「神なき祭り」に通じる議論だと考えられる。

しかしながら、中野は、企業が創業や開店何十周年記念として祭りへ参加を開始した事実については指摘するのみで、検討は行なっていない。宗教学の中牧弘充は会社神社(企業の神社)の分析から、「会社神は『苦しいときの神だのみ』ではなく、ふつう社屋の完成や周年事業の際に勧請される」と指摘しているからである。⁽⁶⁾

また、「神社への信仰心」を論じるときに、小倉祇園太鼓における八坂神社との関わりは論じられているが、それ以外に、参加する企業が神社を祀る場合(井筒屋の本館屋上には瘡守稲荷神社「昭和一年の開業にあたり伏見稲荷神社を勧請」が祀られている)や、他の神社への参拜行動(例えば正月の神社への集団参拜など)と対比をしながら、総合的に捉えるといった議論はなされていない。

さらにいえば、企業の参加について「祭りのイベント化」として一方向的に捉えてよいのかという課題もある。例えば、民俗学の松崎憲三は、「地域社会と寺院・企業」のなかで、「企業は広い意味での地域の文化に対して責任を持たなくてはならない」という企業の社会的貢献について触れた上で、「現在どの地域でも、祭りのイベント化、イベントの祭り化が進行している。すなわち伝統的な祭りと未来を志向するイベントを融合させて一対の行事とすることにより、一面では地域住民・町内会と企業が連帯を図る契機となり、企業にとってはそれに参画することにより、地域社会への利潤還元が少なからず果たせることになる」(一五八頁)と指摘しているからである。⁽⁷⁾

(四) 青森ねぶた祭り・阿波踊り

民俗学の阿南透は、「青森ねぶたの現代の変容」のなかで、青森ねぶた祭りにおける企業が出すねぶたは広告・宣伝目的だけと思われがちだが、決してそれだけでは長続きはしないと指摘する。すなわち、企業のねぶたへの参加の

目的として、①「ねぶたは、従業員や家族慰安の手段であり、またメンバーの親睦を図る格好の手段であること」、②「大規模な企業グループや官公庁では、ねぶた出陣の方が他のレクリエーションよりも金銭的に安上がりなこと」を挙げている。そして、地域ではなく企業や行政だからこそ多額の経費負担が可能であり、地域に代わって企業がねぶたを出したことが、青森ねぶたを発展させる経済的な裏付けになったとしている⁽⁸⁾。

高橋晋一は、徳島の阿波踊りにおける「企業連」について、観光化と関連させながら分析を行ない、参加する企業連の目的は「踊りを通じて県内外の観客に対して企業の存在を示し、宣伝とイメージアップ効果を図ることにある」として、阿波踊りは「企業を見せる」ための媒体なのであると結論付けている⁽⁹⁾。

以上の先行研究から浮かび上がる企業の都市祭りへの参加は、社員教育や会社員同士の親睦の場であるとともに、地域社会や一般観衆に見せる意味合いがあると捉えられる。論者の「神田祭モデル」でいう「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」に近い構造を持っていることが窺える。

しかしながら、先行研究では山車の祭りや阿波踊りといった都市祭りを対象とした企業の参加が分析の中心であり、神輿の祭りにおける企業の参加はほとんど研究がなされていない。また、個別具体的な神社祭礼における企業の参加を対象とする場合、企業で祀る神社の祭りや他の年中行事との関わりなどから総合的に捉えるという視点はほとんど見られない。

二、企業の参加と神田祭⁽¹⁰⁾

かつては徳川将軍が上覧する「天下祭」の一つであった東京の神田祭（神田神社大祭）は、現在では地域社会に

としては町会が出す神輿の巡幸が中心となる都市祭りである。先述のように、神田祭において、企業の参加は進んでいる。

神田神社の氏子町会が広がる神田は、かつては問屋街や商店街が広がる商人・職人の町であり、町内には居住空間のほかに、八百屋や米屋などの商店、銭湯、病院、床屋などが存在し、生活空間としてのまとまりを持っていた。その後、戦後地域社会の変容のなかで中高層のビルが立ち並び企業とマンションの町に大きく変貌を遂げた。再開発で町内にファミリータイプやワンルームのマンションが建設された地域では、平成一二（二〇〇〇）年以降、人口・世帯数は増加傾向にあり、そうした意味では業務空間としてだけでなく居住空間としての性格も戻りつつある。しかしながら、マンションの住民の町会加入、特に町会活動への参加はあまり進んでいない現状がある。

商人・職人の町がビルの町へ変貌を遂げるなかで、夜間人口・世帯数は減少し続け、町内の居住者が減ること、神田祭を含めた町会活動を維持していく担い手が不足した。

一方、ビル化した町内には多数の事業所が入り、昼間人口は増加した。町会は人口減少で不足した町会員の穴埋めを町内の企業に求めた。神田では、町会員に占める法人会員の割合が増加し、企業との関わりを重視する町会の人たちが複数存在するようになった。しかしながら、法人会員の町会参加は町会費の負担などの経済的な側面にとどまり、町会活動への参加はそれほど進んでいない実態が見えてきた。ただし、神田祭には、祭りの担い手としての企業の参加が進んでいる。

以下に、平成二五年のデータから町会が実施する神田祭への企業の参加の具体相を見ておきたい。

(一) 企業の参加と平成二五(二〇一三)年・神田祭

企業の参加が見られる町会は、内神田美土代町会(会社員四〇〇五〇人)、司一町会(城南信用金庫一〇人)、多町一丁目町会(城南信用金庫神田支店約二〇人)、多町二丁目町会(会社員約五〇人)、神田鍛冶三三町会(三菱東京UFJ銀行三〇人)、須田町中部町会(西武信用金庫一三人)、須田町北部町会(りそな銀行三〇人、新日鉄興和不動産二〇人、JR東日本ビルディング、JRステーションリテーリング、みずほ銀行二〇〇三〇人)、鍛冶町一丁目町会(山梨中央銀行三〇人)、鍛冶町二丁目町会(徳力本店一〇人、神田通信機二〇〇三〇人)、神田須田町二丁目町会(向井建設四〇〇五〇人)、神田佐久二平河町会(三菱東京UFJ銀行八人・三協化成一三人・パセラ一人)、岩本町三丁目町会(山崎製パン三〇〇人、本間組二〇人、田島ルーフィング二〇人、貝印一〇人)、神田和泉町町会(YKK一〇〇一五人と凸版印刷一〇〇一五人を含み企業四〇〇五〇人)、室町一丁目会(企業・宮入二二人、町内渡御一二人)、大手・丸の内町会(将門塚を奉賛する一〇社の会社員一〇〇〇人規模)などである。

(二) 企業の参加と金曜日の祭り・蔭祭

鍛冶町一丁目町会、鍛冶町二丁目町会、神田須田町二丁目町会、紺屋町南町会では、平日にしかない企業の会社員を巻き込もうと金曜日の神輿巡幸を行なっている。栄町会では、地元企業の取り込みを図り、金曜日の夜に「ふれあい広場」を神酒所前で開いている。蔭祭のときも神田祭と同じ時期に「ふれあい広場」を実施して企業会員と親睦を図っている。外神田三丁目金澤町会では、金曜日の夜の神輿巡幸を一〇年前から始め、蔭祭の年は企業との懇親会を神田祭の時期に開いている。

町内に有力な企業がある町会では、祭りの担い手も企業に特化したり、祭りを通じて企業との関係を良好にしてい

こうとする町会の戦略が窺える。町会は、企業を取り込むために、金曜日の夜の祭り（神輿巡幸・懇親会）や蔭祭を実施している。

（三）岩本町三丁目町会

岩本町三丁目町会の神田祭の参加者は、昭和四三（一九六八）年は八割が町内の店員であったが、平成四（一九九二）年は町内会員外が五九・六％、平成二五年は企業の参加者が七〇・〇％を越えた。特に、平成二五年は山崎製パンの社員三〇〇人が参加したことから参加者に占める同社社員の割合が高い。祭礼費の寄付においても、山崎製パングループ、本間組、田島グループなどの企業に特化している。

町会の神酒所も山崎製パン本社ビル一Fに設営される。この山崎製パン本社の場所は、かつては東京衣類中央市場ビルであったが、三井建設を経て、現在の山崎製パン本社ビルとなった。

岩本町三丁目町会は、かつては衣類（既製服）の間屋街・商店街^①であったが、その後、大手企業の本社をはじめとした事業所ビルとマンションの町に変貌した。そのため、祭りの担い手も商店の従業員から町内企業、特に大手企業の社員に特化する形に動員方法を移行し、町会の神田祭を維持していることがわかる。また、蔭祭の年にサマーフェスティバル（七月下旬）を実施して企業とのつながりを維持している。山崎製パン本社の敷地内で、佐川急便のトラックの荷台を舞台として、照明車を用意し、出店を出して行なう。

こうした町会と企業のつながりを保つために、本祭や蔭祭の際のみならず、町会役員の日常的な企業への働きかけがなされている。その上に神田祭への企業の参加が維持されているのである。つまり、町会の個人の活躍（人的要因）が企業の参加に大きな役割を果たしている。そのことは、松崎憲三の次の記述からも窺うことができる。

松崎憲三は、「地域社会と寺院・企業」のなかで、岩本町三丁目町会の神田祭について、『朝日新聞』（神田祭りのみこし、企業巻き込み『ソイヤ』…、平成二年五月一三日付）の記事を引用する形で、「地元は企業の町内会参加を呼びかけることで地域の活性化を図ることを決め、数年前から新年会や盆踊りに企業の社員を招いたり、テナントビルの地鎮祭には町内会の代表が出席するなど、積極的な交流を図ってきた。その甲斐あって、約三〇〇の企業が町内会組織に参加することになった。地元町内会による企業に対する働きかけは、実は神田祭りの担い手を確保し、神田祭りを通して企業との交流を図ることを目的としていた。岩本町三丁目の神輿の重さは二トン弱で、七、八〇人の担ぎ手が必要で、二、三時間かけて町内を練り歩くためには、交替要員を含めて少なくともこの三倍の二〇〇人程度を確保しなければならない。周辺の過疎地域では、担ぎ手不足から神輿をトラックに寄せたり、渡御を断念した町内もいくつかあった。しかし、岩本町三丁目についていえば、地道な企業への働きかけが効を奏し、平成二年（一九九〇）の祭りには、二五〇人の担ぎ手中の七割近くが、町内の企業のサラリーマン・OLの参加者であった。こうして、一時危ぶまれた神輿の渡御、祭りの存続が、企業と一体となることで可能となったのである」と紹介している⁽¹²⁾。

（四）大手・丸の内町会（史蹟将門塚保存会）

神田神社の旧蹟地・将門塚の地元、大手・丸の内町会（大手町・丸の内地区）は、千代田区丸の内一丁目・二丁目・三丁目、大手町一丁目（三・四を除く）・二丁目を町会の区域とする⁽¹³⁾。この町会には、住民がほとんどいないため、町内に立地し史蹟将門塚保存会に参与する企業を中心とした企業町会としての特色を持つ。

かつて三菱地所の社長であった渡辺武次郎の発案によって、昭和三二（一九五七）年に町内会として、大手町・丸の内地区に所在する企業・団体・商店等が集まり、会員相互の親睦を深め、共同の福祉を増進することを目的として

「千代田区大手・丸の内町会」が設立された。現在では、約二〇〇の法人が入会し、千代田区の各種施策への協力なども積極的に行ない、「企業町会」としての特色を生かした活動を進めているという。⁽¹⁴⁾

昭和三五年七月二十八日に、地元の町会有志・有力会社が発起人となって、「史蹟将門塚保存会」が結成された。参与法人会員として、三菱地所、三井物産、物産不動産、丸紅などの企業が名を連ねる。現在、将門塚は毎年秋彼岸の一日を選び、史蹟将門塚保存会の主催で例祭が行なわれている。また、神田祭の神幸祭では神田神社の鳳輦が将門塚へ巡幸し、塚前祭を行なっている。

こうした特徴を持つ大手町・丸の内地区の神田祭への参加は以前は行なわれていなかった。昭和四三年の神田祭では、藺田稔の調査によると、神酒所は作らず、神田祭において祭礼行事を実施していなかった。⁽¹⁵⁾ また、平成四(一九九二)年の神田祭でも、松平誠の調査によると、神酒所は作らず、神田祭において祭礼行事が実施されていない。⁽¹⁶⁾ しかしながら、江戸開府四〇〇年を迎えた平成一五年、大手町・丸の内地区の神田祭への参加が開始された。この年に行なわれた神田祭では、三井物産の社員二四人が将門塚保存会の参与法人として神田祭を盛り上げようと、神田神社から借りた神輿で将門塚から神田神社まで渡御し、神田神社へ宮入したという。

これを契機に、社会貢献活動の一つとして史蹟将門塚保存会のメンバーが独自に担げる神輿を作ろうという機運が高まり、史蹟将門塚保存会大神輿を新調した。そして、平成一七年の神田祭では、史蹟将門塚保存会大神輿で神田神社への宮入を果たした。史蹟将門塚保存会大神輿が新調された背景には、関東大震災で行方不明となったという将門神輿の復活を望む神田神社の氏子総代のT・E氏の提案もあったという。⁽¹⁷⁾

新調された史蹟将門塚保存会大神輿は、神田祭の年には将門塚を発御して神田神社へ宮入を行ない、再び将門塚に戻ってきて着御する形を取り、蔭祭の年には宮入を行わず、将門塚を発御して、将門塚に着御する形を取っている。

史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸には、史蹟将門塚保存会の参与法人である三菱地所・三井物産・三井生命保険・物産不動産・三菱東京UFJ銀行・竹中工務店・プロミス・丸紅・パレスホテル・三菱不動産の一〇社が参加する。¹⁸⁾

平成二二年は蔭祭の年であつたが、五月九日に、大手町や丸の内の約一〇社の会社員が過去最高の一一〇〇人参加し、史蹟将門塚保存会大神輿が渡御した。参加する丸紅では、メールなどで社員に参加を呼びかけたところ予想を上回る四八〇人が参加を希望したという。参加したある社員は「いろんな会社の幅広い世代が参加しているのに、神輿を担ぐことで一体感が生まれた。祭りで神輿を担ぐのがこんなに楽しいとは」と感想を漏らした。三井生命保険は社員約一三〇人が参加し、同社の総務グループによると、「各企業とも地域貢献や社会的責任を強く感じている」と人気の理由を説明したという。¹⁹⁾さらに、平成二五年の神田祭には約一三〇〇人もの会社員が参加した。

こうした一〇〇〇人規模の会社員が神輿担ぎに参加する背景には、神田神社の神職の企業との関係を重視する姿勢がある。神田神社宮司の大鳥居信史氏は、神田神社は千代田区・中央区といった日本有数のオフィス街が氏子地域にあり、特に大手町などの地域には住民がほとんどいないため、二〇年ほど前から、企業の氏神意識の定着を図るよう促してきた。大鳥居氏の働きかけによって、以前は企業が正月に神田神社へ参拝する風習はなかったが、現在では正月に六〇〇〇社の企業が参拝するようになった。また、大手町・丸の内界隈の企業では、将門塚への篤い信仰があるが、神田祭と蔭祭において、史蹟将門塚保存会の参与法人役員会から奉納された平将門公の神輿（史蹟将門塚保存会大神輿）を担ぐようになったという。

つまり、大鳥居氏を中心とした神田神社の神職の働きかけが神田神社や将門塚、史蹟将門塚保存会大神輿を媒介として、神田祭への企業の参加につながっていることがわかる。

(五) 企業の参加と女性

先述した中野紀和が指摘するように、企業の参加を契機として、女性の参加が進む側面を持つことは、確かに神田祭においても見られる。一部区間を女神輿にして巡幸できるほどの女性が参加しているところでは、企業の参加が進んでいるところもある。

平成二五（二〇一三）年の神田祭において、岩本町三丁目町会、神田東紺町会では、町会の神輿を一部区間だけ女神輿にした。神田佐久二平河町会では、宮入の際、神輿の前棒は全部女性になり、神田鍛冶三会町会では、金曜日の夜に子ども神輿を女神輿にして、町内渡御を行なった。

ここには、企業参加の進む岩本町三丁目町会、三菱東京UFJ銀行三〇人が参加する神田鍛冶三会町会などが含まれている。また、先述した大手・丸の内町会の史蹟将門塚保存会大神輿においても、一部区間を女神輿にして巡幸している。

須田町中部町会では、全区間を女神輿で担ぐ「元祖女みこし」を擁するが、松平誠が調査した平成二年の神田祭においては、金融機関の女性参加者の割合が全体の三五%を占めていた。^{②①}

以上のように、神田祭からは、神田神社の神職や町会の個人といった個人の活躍（人的要因）が、結集のための核の存在（神輿、将門塚、神田神社）を媒介として、企業の参加を維持する上で重要な役割を果たしていることがわかる。そして、金曜日の祭りと日曜日の祭り（連合渡御・宮入）を中心に企業の参加がなされていることが指摘できる。

三、企業の参加と山王祭

神田祭と並び、かつては「天下祭」と称された山王祭においても企業の参加が進んでいる。ここでは平成三〇

(二〇一八)年の山王祭の実態から、企業の参加の模様を見ておきたい。平成三〇年の山王祭では、六月八日(金)・九日(土)・一〇日(日)を中心に祭礼行事が実施された。

(一) 企業の参加と金曜日の祭り

六月八日(金)に神幸祭が行なわれた。七時三〇分に鳳輦が永田町の日枝神社を出発し、午前中、麴町エリアを巡り、午後は、京橋・日本橋・銀座エリアを巡って、一六時四五分の予定で日枝神社へ戻る。午前中の麴町エリアの巡幸において、沿道の会社員が鳳輦を出迎える様子が見られた。神田祭においても神幸祭は行なわれるが、神田祭の神幸祭は土曜日に実施されるため、会社員が鳳輦を出迎える光景はほとんど見られない。

また、下町連合(日本橋・京橋・茅場町・八丁堀)では、町会ごとに金曜日夜の神輿巡幸やビールパーティーが行なわれた。以下に、その詳細を見ておきたい。

京橋(京橋一之部連合町会)

京橋一之部連合町会では、「京橋地区にお勤めの方」(「神輿を担いだことない方、歓迎」)を対象とした神輿の「金曜宵宮渡御」を実施した。参加費は無料で半纏は町会半纏を貸し出すが、足袋や小物は購入してもらう形で行なっている。着替え場所として京橋区民館が用意されている。宵宮渡御は、六月八日(金)の一八時四五分に京橋二丁目町会神酒所に集合し、一九時三〇分から二〇時三〇分までの予定で、京橋一丁目・二丁目・三丁目の界隈を巡幸した。巡幸ルートには、戸田建設、ブリジストン、メルシャン、明治屋などの企業がある。渡御終了後には簡単な交流会が行なわれた。

京橋一之部連合町会青年部（京橋はじめ会）会長のN・S氏（昭和三七年生）は、「再開発が進んで、町内のほとんどが企業になったときに、町の昔からの人も企業も唯一、つながれるのは祭りだと思います。祭りは神事です、最後は町のつながりです」と話す⁽²⁾。金曜日の宵宮の役割がこの語りからも窺える。

日本橋（日本橋六之部連合町会）

日本橋三丁目西町会では、六月八日（金）に夜、神輿渡御を行なった。東京建物、DIC、住友不動産、高島屋などの企業のほか、江戸祭貴、鳳凰會といった神輿同好会が参加する。

江戸橋（日本橋一丁目東町会・日本橋二丁目町会・日本橋三丁目東町会）は、一八時二〇分から二〇時五〇分までの予定で金曜日の巡幸を行なった。

茅場町（日本橋七之部連合町会）

茅場町一丁目町会では、青年部主催で六月八日（金）の一八時から「夜宮」の神輿渡御を実施した。これは「茅場町に職場のある方、知人が茅場町にいる方など、茅場町にゆかりのある方」であれば、誰でも参加できるもので、町内に貼られたポスターなどで担ぎ手が募集される。初心者への参加も可能で、夜宮の巡幸に先立ち、五月三〇日（水）の



写真1 山王祭 日本橋三丁目西町会・金曜日の祭り
（平成30年6月8日、筆者撮影）

一八時三〇分から茅場町一丁目町会会館で「担ぎ手説明会」が開催された。夜宮の巡幸には郵船不動産、三井住友銀行（SMBC）などの企業が参加していた。

茅場町一丁目町会では、かつて神輿巡幸が途絶えた時期もあった。『朝日新聞』（朝刊、平成二「一九九〇」年六月五日付）の「燃える、その裏で（東京人いるニューヨーカー3）東京」の記事によれば、茅場町一丁目町会の神輿が「二年前から飾り物になった」とある。記事によれば、当時の町会長は「今はかつぐ人がいない。さりとて、見ず知らずの人にかつがせるわけにはいきません」と話し、神輿の巡幸の代わりに、寄席と縁日を開くようになったとしている。こうして一旦途絶えた神輿巡幸が周辺企業などを巻き込みながら、復活することになる。

平成二一年、茅場町一丁目交差点角に花王株式会社の本社が移転した。花王は「地域の方々は弊社の大事なステータホルダー」との思いで、移転後、地域活動に積極的に参加するようになった。同じ頃、茅場町一丁目町会の青年部では、「住民が不足する中で何か手を打たなければ」と、平成二六年の山王祭で周辺企業にも担ぎ手を募り、「夜宮」を復活させ、花王も新入社員と有志の約五〇人程度が初参加したという。⁽²⁾

なお、茅場町二丁目町会に隣接する兜町町会の山王祭には、平和不動産の社員が参加している。平成二四年の山王祭に初めて社長を筆頭に三人が参加した。平成二八年の山王祭には七〇人ほどの社員が集うまでになったという。⁽³⁾

茅場町二丁目・三丁目町会では、八日（金）の一八時から一九時まで神輿の町内渡御を行ない、一九時から町内の八米商店前で、町会員・法人会員を対象としたビールパーティーを実施した。

八丁堀（京橋七之部連合町会）

八丁堀一丁目町会では、六月八日（金）の一七時三〇分から神酒所前にて「八丁堀一丁目町会神輿披露会（生ビール

パーティー」を実施した。これは寄付を貰った企業の会社員・学生・個人（八丁堀一丁目に住・在勤・在学者）を対象としたものである。

八丁堀四丁目東町会では、六月八日（金）の一七時三〇分から二〇時まで前夜祭（ビールパーティー）を実施した。このビールパーティーには町会員以外の「一般参加」も可能で、ビールやおつまみ、Tシャツなども販売され、多くの人でにぎわった。

（二）企業の参加と日曜日の祭り

六月一〇日（日）には、九時一〇分に日本橋日枝神社（摂社日枝神社）を宮出して、京橋から日本橋までの中央通りを連合渡御する下町連合渡御が行なわれた。この連合渡御には、神輿を担ぐ半纏から、京橋宝町会の神輿には清水建設、日本橋一丁目町会の神輿には野村證券、野村不動産、三井不動産、国分、みずほ銀行などが、日本橋通二丁目町会の神輿には水戸証券、日本橋高島屋、丸善、三井不動産、住友不動産などが、檜物町の神輿には、東京建物などの企業が参加した。

四、企業の参加と渋谷の宮益御嶽神社の祭礼

東京渋谷にも、企業の参加が進む祭礼がある。宮益坂の途中にある宮益御嶽神社の祭礼である。同神社の祭礼における宮神輿に企業の参加が見られるのである。

ここでは、平成二九（二〇一七）年と平成三〇年のデータをもとに見ておきたい。平成二九年は九月二〇日（水）、平成三〇年は九月一九日（水）に宮神輿の巡幸は実施された。いずれも平日（水曜日）の午後、一三時半から一七時

頃まで行なわれ、渋谷宮益商店街振興組合・宮益町会のエリアを渡御した。

(一) 宮益町会の変容

昭和三〇(一九五五)年四月の『火災保険特殊地図』を見ると、渋谷宮益商店街振興組合・宮益町会のエリアには、東急文化会館、協和銀行渋谷支店、日興證券渋谷営業所、三菱信託銀行渋谷営業所、宮益坂ビルディング、大東京渋谷支部、東横ホテル、渋谷郵便局、朝日生命、興亜火災海上保険などが立ち並ぶものの、東急文化会館の裏側や、御嶽神社周辺には多数の住居が存在し、宮城医院という病院もあった。また、風呂桶店、金物屋、古本店、古道具店、電気店、質屋、楽器店、建具店、工務店、うなぎ屋、洋画材料店などの商店が立ち並んでいた。この頃は、金融機関はすでに複数あるものの、商店と居住空間のある町であったことがわかる。しかし、その後、ビル化が進み、中高層のビル街へ変貌した。

平成四(一九九二)年発行の『まちづくりのあしあと―渋谷区町会連合会創立三十周年記念誌―』によれば、宮益町会の会員数は一二〇世帯としている。宮益町会は「戦前戦後共、百軒前後の小町会であるが、古くから御嶽神社(千五百七十)(元亀年間)を中心に町会、商店街、両輪で街づくり、経済の発展に力を入れ早くも昭和二十八年都営第一号のビル建設以降林立の如くビル建設が続き、現在一ヶ所のみ木造建、而し入居者、銀行、証券、保険会社でマネーセンターの観がある」(一三六頁)という。また、「当町会は商業地域で地価の高騰により会員数は九十軒であるが、住居を共の軒数は五、六軒で、ビル建設をして他地区に住居を移す方々ばかりで」(一三七頁)としている。²³

渋谷宮益商店街振興組合が発行する『宮益だより』平成二二年一月一五日号によると、「町会発足以来五十余年が過ぎ、大きく街の様相が変わり会員百五十件足らずのうち、九十九%が法人会員であり、居住する会員は十%程度に

なりました」とある。

居住者は少なく、法人会員が大多数を占める商店街・町会に変貌したことがわかる。こうした町の構成は、宮益御嶽神社の祭礼の担い手にも影響していることがわかる。日曜日に神輿の巡幸を行っていた時期もあったが担ぎ手がないので平日に実施するようになったという。

平成二九年と平成三〇年における神輿の担ぎ手は、次の構成になっている。

(二) 宮神輿の参加者(担ぎ手)

平成二九(二〇一七)年の宮益御嶽神社の宮神輿の担ぎ手は、九〇人(男性六四人「七二・二%」・女性二六人「二八・九%」)である。その内訳は、東京地下鉄株式会社半蔵門線乗務管区二六人(男性一五人・女性一人)、みずほ銀行渋谷支店八人(男性三人・女性五人)、みずほ信託銀行渋谷支店四人(女性四人)、東急建設株式会社一人(男性一〇人・女性一人)、K氏・M氏一〇人、りそな銀行六人(男性三人・女性三人)、東急電鉄株式会社三人(男性三人)、植村写真館二人(女性二人)、KN氏「本日の着付けも担当」一人(女性一人)、三浦ピアノ一人(男性一人)、シグマアテンドサービス二人(女性二人)、ウエスト一人(男性一人)、渋谷東急REIホテル二人(女性二人)、世紀東急工業株式会社東京支店七人(男性七人)、渋谷ヒカリエ八人(男性



写真2 宮益御嶽神社の宮神輿巡幸
(平成30年9月19日、筆者撮影)

六人、女性二人）、神谷商事・二人（男性一人）、東京キリンビバレッジサービス株式会社・二人（男性一人）、株式会社伊藤園・一人（男性一人）、トウド事務・二人（男性二人）、渋谷区行政サービス商工会館・一人（男性一人）などである。

平成三〇年の宮益御嶽神社の宮神輿の担ぎ手は、八九人（男性五九人「六六・三％」・女性三〇人「三三・七％」）である。

その内訳は、みずほ銀行渋谷支店・七人（男性三人・女性四人）、みずほ信託銀行渋谷支店・四人（女性四人）、東急建設株式会社・八人（男性七人・女性一人）、東急リニール株式会社・二人（男性二人）、株式会社日本設計・三人（男性二人・女性一人）、K氏・一人（男性一人）、K氏・九人（男性六人・女性三人）、りそな銀行渋谷支店・五人（男性二人・女性三人）、東急電鉄株式会社・三人（男性三人）、植村写真館・一人（女性一人）、KN氏「本日の着付けを担当」・一人（女性一人）、シグマアテンドサービス・二人（女性二人）、渋谷東急REIホテル・二人（男性一人・女性一人）、世紀東急工業株式会社東京支店・一人（男性九人・女性二人）、渋谷ヒカリエ管理組合・七人（男性四人・女性三人）、株式会社植松・二人（女性二人）、シュウエイトレーニング・一人（男性一人）、渋谷区行政サービス・四人（男性二人・女性二人）、東京地下鉄株式会社半蔵門線乗務管区・一六人（男性一六人）である。

平成二九年と平成三〇年とはともに、女性の参加者は約二・三割を占めている。女性の参加率が高く、特に、金融機関の女性の参加率が高いことがわかる。多数の企業の参加者が担ぐという点で、神田祭の史蹟将門塚保存会大神輿と共通している。ただし、宮益御嶽神社の祭礼は平日の実施であるが、史蹟将門塚保存会大神輿の巡幸は日曜日の実施である。実施日については、神田祭や山王祭の金曜日の祭りに近い。

このほか、同じ渋谷の金王八幡宮の祭礼においても、企業の参加は見られる。平成二六年の道玄坂町会の宵宮（土曜日）には、日立エレベーターや東急不動産の社員が神輿渡御に参加した。⁽²⁵⁾ また、平成二七年の渋谷中央街の宵宮（土曜日）には、東急不動産、清水建設、三菱東京UFJ銀行、横浜銀行、三井住友銀行、さわやか信用金庫の社員が参加した。⁽²⁶⁾

おわりに

以上のように、企業の参加と都市祭りの実態について検討をしてきた。金融機関や鉄道、百貨店、再開発に関わる建設業、あるいは地域に本社が立地する企業の参加が多いことが浮き彫りとなった。そして、神田祭、山王祭、渋谷の祭礼からは、金曜日や水曜日といった平日の祭りと、日曜日といった休日の祭りへの企業の参加があることが明らかになった。金曜日の祭りは、中野紀和が考察を行なった小倉祇園太鼓（八坂神社の祭礼）における御神幸も金曜日に実施され、そこに多くの企業が参加している実態とも類似している。

平日の祭りは、神輿の渡御に参加するのみならず、ビールパーティーなどの懇親の場への企業の参加が見られた。そうした意味では、平日の神輿巡幸を見る不特定多数の観客は少なく、むしろ町会の祭りにおいて企業が地元地域の人たちに協力している姿を「見せる祭り」としての性格や地域との交流の場としての性格が色濃いといえる。

また、多くが夜に行なわれ、「宵宮」や「夜宮」などと呼ばれ、会社帰りに参加する形になっている。渋谷の祭礼における土曜日の宵宮は、金曜日の夜の祭りに近いと考えられる。企業の参加者が多数を占める金曜日や土曜日の神輿巡幸には、企業の参加者のみならず、神輿同好会のメンバーや熟練の担ぎ手も何人か参加し、巡幸を支えている側面も見えてきた。

一方、休日の祭りは、昼の祭りとして行なわれる。連合渡御や宮入の場面において、神輿巡幸を見る不特定多数の観客が多く、企業名の入った半纏を着ている場合、不特定多数の観客に自分たちの会社名をPRする場にもなっている。同時に、観客がいることで参加する会社員にとっても祝祭性が高くなると考えられる。ただし、金融機関など日曜日が休業日の企業は、休みの日にわざわざ出てきて祭りに参加することになる。

ところで、神社を祀る企業も存在する。企業の神社の祭りは、地域と一体となつて行なう事例は少なく、多くが企業の内部に閉ざされた形で役員が中心となつて行なわれる祭りである。⁽²⁷⁾そのため、社内的な意味合いが強いと考えられ、町会が祀る小祠の祭りに近いと考えられる。反対に、都市祭りへの企業の参加は、神輿という結集のための核を媒介として、社内の祭りとしての意味合いと社外に見せる祭りとしての意味合いの両面を持っているといえる。

つまり、都市祭りへの企業の参加は、社外に対しては、企業の神社の祭りと異なり、地元の地域社会や一般観衆に企業の存在を示す「見せる祭り」としての役割があるといえる。それは社会貢献活動の一環として企業イメージを向上させるとともに、商品の販売促進などの利潤につなげる目的もあると考えられる。一方、社内に対しては、社員教育（新入社員の研修の機会、社会から「見られる」社員としての研鑽の場など）の一環としての性格、社員同士の懇親やレクリエーションの場としての意味合いも持つと捉えられる。

宗教社会学の石井研士は、企業が稲荷神社を祀ったり、墓地を持つのは、企業の集団主義を基盤にして宗教行為が行なわれているためで、組織の持つ集団主義の表出と捉えている。ただし、企業で祀る神社の場合、会社の経営に直接関わる役員だけが集まつて、祭祀が行なわれる方が多く、一般社員は、大祭や入社するときにも参拝を義務付けられたり強制されることはない。極端な場合には、会社の屋上に祀られていることも知らない場合がある。つまり、神を祀ることが、直接会社の構成員の一体感を高揚させることに機能しておらず、祭祀に加わること、その会社の構成員であることに明確な関係が見出せなくなっていると指摘している。⁽²⁸⁾

この石井の指摘を踏まえると、都市祭りへの企業の参加は、企業の神社の祭りと異なり、一般社員も参加することから、神田祭の史蹟将門塚保存会大神輿の事例のように、構成員や近隣企業同士の一体感を感じさせ、集団主義につながる側面を持っていることが窺える。

そうした観点からいえば、都市祭りへの企業の参加は、論者の「神田祭モデル」でいう「都市祝祭と町内の祭りの複合構造」を持つ町会の都市祭りに近く、「都市祝祭と社内の祭りの複合構造」を持つ企業の都市祭りと捉えられると考える。

この都市祝祭と社内の祭りをつなぐ存在として、神輿や神社、将門塚といった結集のための核がある。将門塚と史蹟将門塚保存会大神輿、神田神社、あるいは宮益御嶽神社と宮神輿など、一定の聖性を持つ、結集のための核の存在が複数あるとき、企業の参加の動機付けがしやすいのではなからうか。そして、この結集のための核の聖性を強化し、動員を維持するのは、神職や町会の個人、企業の個人であると考えられる。こうした個人と結集のための核との関わりは、企業の参加と都市祭りの関係を考える上でも重要な研究課題である。

そうした意味では、企業の参加は、「祭りのイベント化」として一方向的に捉えられるというよりは、「イベントの祭り化」としての側面も併せ持つていられる。都市祭りへの女性の参加をもって、都市祭りへの企業の参加は「祭りのイベント化」と固定的に捉えてしまうのは、複合的な性格を持つ都市祭りの動態を踏まえると早計である。むしろ、「祭りのイベント化」と「イベントの祭り化」の両面から都市祭りへの企業の参加を検討していくことも大きな研究課題といえる。そして、この両面を捉えて行く際に、企業の神社の祭りや氏神神社などへの企業の集団参拝、他の年中行事における企業の参加とも対比し、総合的に検討していくことも重要な研究課題といえるのではなからうか。また、企業が都市祭りへ参加する契機についても検討する必要がある。創業何十周年や移転直後などの何らかの記念すべき時と関わっている可能性があるからである。

今後、更なる事例の集積と比較検討が必要であり、こうした企業の参加と都市祭りの考察から、企業と宗教の分析を深める一助にできればと考える。

註

- (1) 秋野淳一『神田祭の都市祝祭論―戦後地域社会の変容と都市祭り―』岩田書院、平成三〇年。
- (2) 秋野淳一「現代に生きる山王祭・下町連合の魅力―都市祝祭と町内の祭りの複合構造―」『平成三十年山王祭』（日枝神社下町連合、平成三〇年）。および日本民俗学会第七〇回年会・研究発表「現代の『天下祭』に関する予備的考察―神田祭と山王祭の都市祝祭論へ向けて―」（於駒澤大学、平成三〇年一〇月一四日、日本民俗学会の研究発表をもとに別稿にまとめる予定）。
- (3) 『日本国語大辞典』の「きーぎょう」の項 (<https://japanknowledge.com/lib/>)、平成三〇年十二月二二日閲覧。
- (4) 米山俊直『天神祭』（中公新書）中央公論社、昭和五四年。
- (5) 松平誠『都市祝祭の社会学』有斐閣、平成二年、二七一―二八〇頁、二九四―二九六頁。
- (6) 中牧弘充「会社のカミ・ホトケ―経営と宗教の人類学―」講談社、平成一八年、六三頁。
- (7) 松崎憲三『現代社会と民俗』名著出版、平成三年、一五三―一六三頁。
- (8) 阿南透「青森ねぶたの現代の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、国立歴史民俗博物館、平成一五年、二七八―二七九頁。
- (9) 高橋晋一「阿波踊りの観光化と『企業連』の誕生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一九三集、国立歴史民俗博物館、平成二七年。
- (10) 前掲秋野『神田祭の都市祝祭論』に基づく。
- (11) 町会長の日・K氏（昭和二三年生）によれば、「五〇年前は洋服屋（紳士服）の街であった。住込みの従業員がいる二〇坪、三〇坪のお店がたくさんあった。現在、洋服屋は三軒のみ。流通が大きく変化して廃業し、マンションへ変わった。街並みが大きく変貌した」という（筆者による調査）。
- (12) 前掲松崎『現代社会と民俗』一五五―一五六頁。
- (13) 神田倶楽部『明神さまの氏子とお神輿』武蔵野書院、平成一〇年、三六三頁。
- (14) 麴町わがまち情報館 (<http://koujimachinet/town/otemarub.html>)。

- (15) 蘭田稔「祭と都市社会」『天下祭』（神田祭・山王祭）調査報告（二）『國學院大學日本文化研究所紀要』第三輯、國學院大學日本文化研究所、昭和四四年。
- (16) 松平誠「都市祝祭伝統の持続と変容―神田祭による試論」『応用社会学研究』第三五号、立教大学社会学部研究室、平成五年。
- (17) 「将門の縁 神輿復活」『讀賣新聞』朝刊、平成二六年一月五日付。
- (18) 織田桂「サラリーマンが神輿を担ぐ!」『東京人』二〇一二年六月号、都市出版、平成二四年、八二―八三頁。
- (19) 「神輿に燃えるビジネスマン」『讀賣新聞』朝刊、平成二二年五月八日付。
- (20) 松平誠「現代神田祭仄聞」『国立歴史民俗博物館研究報告』第三三集、国立歴史民俗博物館、平成三年。
- (21) 前掲秋野「現代に生きる山王祭・下町連合の魅力―都市祝祭と町内の祭りの複合構造―」。
- (22) 「平成三十年 山王祭」日枝神社下町連合、平成三〇年、五一頁。
- (23) 前掲『平成三十年 山王祭』、五一頁。
- (24) 「まちづくりのあしあと―渋谷区町会連合会創立三十周年記念誌―」渋谷区町会連合会、平成四年。
- (25) 秋野淳一「渋谷・道玄坂の祭礼からみえる『共存』への課題」古沢広祐責任編集『共存学3』弘文堂、平成二七年。
- (26) 秋野淳一「渋谷の都市祭りと地域社会―神田祭との比較を交えて―」上山和雄編著『渋谷学叢書5 渋谷 にぎわい空間を科学する』雄山閣、平成二九年。
- (27) 神社新報社編『企業の神社』神社新報社、昭和六一年。宇野正人「企業が祀る神社」『都市民俗学へのいざない―混沌と生成』雄山閣、平成元年。石井研士「銀座の神々―都市に溶け込む宗教―」新曜社、平成六年。
- (28) 前掲石井「銀座の神々―都市に溶け込む宗教―」二五二―二五四頁。

追記

本稿は、平成三〇年度神道宗教学会第七二回学術大会で研究発表した「企業の参加と都市祭り」（於國學院大學、平成三〇年一二月九日）のレジュメを基に大幅に加筆修正を加えたものである。また、國學院大學二世紀研究教育計画委員会研究事業「渋谷の都市形成と再開発に関する研究」（研究代表…阪本是丸教授）の研究成果の一部である。